「空」から「雲」へ、「雲」から「空」へ

参考調査掛　　都　築　澄　子

館報「静脩」の表紙題字面を飾っているのは、京都大学附属図書館一階の参考図書閲覧室西壁面に掲げられている石膏レリーフの写真です。附属図書館に通ったことのある人、図書館に勤める人達にとっては、このレリーフはなじみの深いものです。あるいは「静脩」表紙で、あるいは現在の図書館一階閲覧室で、ことによると、昭和58年に建て替えられる前の旧附属図書館正面玄関の上部に飾られていた頃から、この作品を目にしている方も多いでしょう。この間、永年にわたってこの作品は「雲」と呼ばれてきました。「静脩」誌上でも、Vol. 1 No. 1（あとがき），Vol. 1 No. 2（『雲』鰺坂二夫氏）,Vol. 12 No. 1（『斎藤素巖作の「雲」の管理について』），Vol. 15 No. 2（『「雲」の作者－斎藤素巖という人－』古原雅夫氏），Vol. 25 No. 4（『「雲」（標題写真）を改版』）で、「雲」と題されているこの作品の記事をみつけることができます。問題のレリーフの下には『斎藤素巖作「雲」(大正13年)』という作品名プレートがつけられていたのでした。

ところが、Vol. 25 No. 4 の記事では「雲」に注釈がついていて、はじめは「空」といわれていた、と記されています。また、昭和62年度の学部入学式で、西島安則総長は、『「空」と題された作品、何時の頃からか「雲」とも呼ばれています』と述べられています（「京大広報」330号（1987.4））。さらに、京都大学庶務部広報調査課が発行している「京都大学概要」の表紙を飾る写真でも、これと同じ作品が、『大学本館正面玄関を飾る「雲」(平成５年度版からは「空」)　斎藤素巖作』となっているのです。「雲」か「空」か、この作品のもとの題は一体どちらであったのか、どのような経緯でこのように二通りの名前で呼ばれるようになったのか、確かめてみたくなりました。

先の「京大広報」にも記載されているのですが、「京都帝国大学新聞」の大正14年５月15日の記事に、この作品が京都大学に寄贈された時の事情が載っています。附属図書館所蔵の「京都帝国大学新聞」縮刷版によりますと、『新館入口を飾る二間餘の浮彫「空」　昨年の帝展で人気を集めた斎藤素巖氏の力作』とあります。斎藤素巖氏作の「空」は大正13年の帝展に出品されたもので、京都帝国大学が譲り受けたのです。そして、大正11年から建て始められていた本部新館（現在の時計台）がこの年に竣工したので、その正面玄関車寄せの上部に、この石膏レリーフをもとに阿部整美氏がブロンズに鋳上げたものが掲げられたのでした。この据付けの三日後の５月17日には、大学の創立を祝う行事が挙行され、摂政宮が来学されるので、それに間に合うようにと、牛車二台で運び込み大急ぎでとりつけられたようです。斎藤氏ご本人も大学に来られてこれを検分し、阿部氏の功績をほめたたえたと記事にもありますので、どうも「空」という題の正しさが、断然現実味を帯びてまいります。また、元の作品は石膏製でもあり壊れやすいので、別の場所にこれを保存したとあります。これが附属図書館であったのでしょう。当時の図書館建物は、昭和23年にできあがった旧館よりもさらに前の代のものであって、明治32年より増改築を重ねてきたものが、大正14年７月の第三書庫の増築によって完成された頃にあたっています。さらに同記事によりますと、同じ作者の出世作「秋」も、建築学科講師の中牟田氏が斎藤氏の後輩である縁から乞い受けて、建築学教室に飾ってあったようです。

なお正確を期するためには、この前の年の帝展に出品された斎藤氏の作品が何と名づけられていたかを確かめないといけないでしょう。帝展出品作品のリストを、学術情報センターの図書目録システム（NACSIS-CAT）で「帝展」というキーワードで検索してみると、「文展・帝展・新文展・日展全出品目録：明治40年－昭和32年（日展史編纂委員会編1990)」があり、その所蔵館は東京芸術大学資料館であるとわかりました。東京芸術大学附属図書館に依頼を出して、斎藤素巖氏大正13年帝展出品作の作品名を調査していただきました。その回答は案の定、「空」でした。こうして、この作品の題は当初は「空」であったことが判明したのです。その結果、図書館所蔵の作品の下のプレートは『斎藤素巖作「空」（大正13年)』と変更することになり、本年（平成６年）９月より「雲」は「空」に変えられました。

斎藤氏の作品は、「空」から、雲か空かとさまよい、いま「空」へ戻ったのです。「雲」がいつ、いづこから現れたのかは霧のかなたの出来事です。